

想作天文学 [VII]

イーハトーボ

イーハトーボとは、宮沢賢治が好んで呼んだ岩手県のことであるが、古来中央から遠くはなれた僻地とみなされてきた。しかし、このような僻地から天文学の当時としての第一線の知識を世のなかに紹介したり、新しい事実を発見した人たちが互いになんのつながりもなく出現したのである。

まず、水沢出身の高野長英(1804-1850)は、脱獄後1846年に「そももる四星編」を訳して、1801年から1807年にかけて相い次いで発見された、4コの小惑星、すなわちセレス、パラス、ユノー、ヘスターについての当時としてはもっとも新しい知識を紹介した。

くわしい内容については、筆者が天文月報、第56巻、第3号(1963)に解説した。表題の「そももる」については、後日談があった。故人となられた広瀬秀雄さんは、英語のスマール、すなわち小惑星の小的訛りであろうと示唆された。ところが、1976年になって、ドイツの天文学者の名前であることがわかり、原本が静岡県立図書館葵文庫に所蔵されていることが山下愛子氏によって指摘された。原著の出版年代が1834年であるから、高野長英が真理を究める学問としての天文学の新知识を吸収して、世のなかに紹介しようとした熱意がうかがわれる。

それから約半世紀後、1899年に水沢に国際緯度観測所が設置され、1902年に初代所長木村栄先生がZ項を発見された。このZ項の導入は当時としてはかなり先見の明にあふれたもので、その真の原因は約70年後になって、流体核をもつ弾性体地球にあることが、同じ観測所の若生康二郎さんによって指摘された。国際緯度観測所が水沢に設置されたことは、たまたま北緯39°8'上にあったからにすぎない。

ちょうどその頃花巻に生れた宮沢賢治(1896-1933)は、「銀河鉄道の夜」のなかで銀河系について、1920年代の当時としてはもっとも新しい知識を平易に解説し、日本にも導入されたばかりのアインシュタインの相対性原理にもとづく真空の解釈を正しく伝えたり、また星間物質の存在を暗示していた。賢治は、また、たびたび、水沢の緯度観測所を訪ねたが、どこまでも無名の見学者で終わったようである。「風の又三郎」初稿版には、テニスに興じる木村先生の所作をユーモラスに描いていた。

こうしてふりかえって見ると、高野長英-木村栄-宮沢賢治といった3人の間には、一見なんのつながりも見出されないが、時系列的に見ると、19世紀初頭、20世紀初頭という系列が見られる。イーハトーボは、現代ではもはや僻地ではなくなったが、来たるべき21世紀初頭に、まったく新しい天文学の開発を産みだすエネルギーをもっていることが、期待される。(SUGAWA)

☆ ☆ ☆

◇ 7月の天文暦 ◇

日	時	記	事
4	23	地球	遠日点通過
5	10	月	最遠
6	17	望	
7	20	小暑	(太陽黄経 105°)
12	1	冥王星	留
14	13	下弦	
20	6	月	最近
21	4	朔	
23	13	大暑	(太陽黄経 120°)
25	17	水星	外合
28	3	上弦	

◇ 7月の日月惑星運行図 ◇

